

## 【書評】

**Alexander Schnell, *Der frühe Derrida und die Phänomenologie. Eine Vorlesung* (Vittorio Klostermann, 2021)**

峰尾公也

著者のアレクサンダー・シュネル (Alexander Schnell) は、1971 年生まれ、ベルリン出身の哲学者である。シュネルは、パリ第 I 大学と第 XII 大学で哲学を学んだのち、2001 年に「フッサールにおける時間の問題」で博士号を、2008 年には「超越論哲学の諸形態 (フィヒテ、シェリング、フッサール、ハイデガー)」で教授資格を、それぞれ取得する。その後、パリ第 IV 大学やフライブルク大学などのポストを歴任。2016 年以降は、ドイツのヴッパータール大学の教授に就き、同大学にラズロ・テンゲイ (László Tengelyi) が設置した「超越論哲学と現象学のための研究所 (Institut für Transzendentalphilosophie und Phänomenologie)」(ITP) の所長などを務める。目下、彼の名は、今日の国際的な超越論哲学および現象学の研究を支える泰斗のひとりとしてよく知られている。

さて、2021 年 5 月にヴィットリオ・クロスターマン社の「赤シリーズ (Rotereihe)」から刊行された本書『初期デリダと現象学』は、デリダの 1953/54 年の修士論文『フッサール哲学における発生の問題』を取り上げた、全 14 回に渡るシュネルの講義録である。もっとも、本書は、単なるテキスト註解に終始するものではなく、その書名が示すように、まさしく「初期デリダ」と「現象学」の関係を争点としている。それによりまた、超越論哲学および現象学の主要な流れのうちに、初期デリダの仕事を位置づけ直そうとしている。そればかりか、シュネルによると、21 世紀以降四散の危機にある現象学に生産的かつ独創的な道を示しうる根本動向が、初期デリダのテキストのうちに見出せるという。そのような根本動向を、シュネルは、哲学や思想の学派はかならず、原点である「第一世代」、その教えを引き継ぐ「第二世代」、原点を問い直し、解体しさえする「第三世代」という計三つの世代を経るといふ、パトリス・ロロー (Patrice Lorau) のテーゼを現象学派に当てはめることで明らかにしようとする。それによると、「第一世代」は「建国の父 (Gründerväter)」(フッサール、ハイデガー、初期フィンク)、「第二世代」は「仲介者 (Vermittler)」および(「他者性」への)「開放者 (Öffner)」(サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス、インガルデン、パトチュカ、後期フィンク、リクールなど)、「第三世代」は「過渡世代 (Übergangsgeneration)」(デリダなど)となる。こうしてみると、1950 年代の時点ですでにデリダは、「第二世代」をいわばスキップして「第三世代」の仕事に着手しはじめていたことがわかる。以上からシュネルは、マリオンやリシールらとともにデリダを、来たるべき未来の現象学をすでに根本において形作っていた「第三世代」に位置づけたうえで、次のように主張する。「デリダ自身は、つねに「形而上学」という概念を厳として拒否してきたが、ここで私が支持する見解によれば、デリダのうちに、

まさしく 21 世紀における現象学の主要な流れのひとつとして到来が予告される「現象学的形而上学」の非常に重要な代表者を見ることは、間違いなく正当である」(pp. 24-25)。

このように、本書の読解の方向性は、初期のデリダにある種の現象学的立場をはっきりと認めようとするものである。一般に、デリダは、ひとりの現象学者というより、現象学そのものの研究者ないし解体者とみられることが多いため、これはただちには首肯しがたい点かもしれない。ともあれ、シュネルが試みているのは、デリダを現象学者に仕立て上げ、彼が拒否している「形而上学」の内部に強引に押し込めるのではなく、三世代をまたいで展開していく一連の運動として現象学を捉えることで、彼の仕事をその最後（あるいは最新）の世代に属するものとして検討することである。昨今行き詰まりを迎えつつあるかに見える現象学の教条的理解を刷新し、現象学がこれから辿るべき道先の案内人としてデリダを読解すること、これが試みられているのである。

上記のような読解の方向性のもとで試みられる本書の『発生の問題』註解は、非常に明快であり、デリダの複雑なフッサール論を読解するうえで大いに助けとなる。テキストの整理や解説はもちろんのこと、『発生の問題』以後のデリダの著作との関連についての指摘からは、とくに得るものが多い。なにより「現象学的形而上学」として明らかにされる初期デリダの立場が、フッサールのみならず他の多くの哲学者たちとの繋がりにおいて理解しやすくなっている。本書を通じて読者は、フッサール哲学が直面していた「発生」にかかわる根本問題に対し、初期のデリダがいかなる着手の方針を示していたかを理解するであろう。そしてまた、その方針が、のちにデリダが辿ることになる思索の道筋を、臆気とはいえずでに広範囲にわたって照らしていたことも、同時に理解するに違いない。